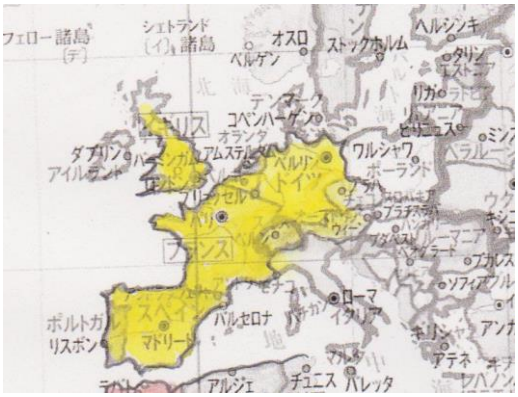
「旅鳥逍遥」２.欧州編

YUWV 九州支部　加 藤 征 治（文理、S41 年卒）

世界の地理学的な７大州（大陸）の区分や近年の欧州連合（EU）の枠組みとは異なるが、ここでは欧州（ヨーロッツパ）編として、何度か訪れている数ケ国の、いろいろな脚跡を辿る。



イギリス（グレートブリテン・北アイルランド連合国）

イギリスの世界遺産の数は世界７位であるが、ロンドン市内とその周辺にも文化遺産が多い（ちなみに１位はイタリア）。ロンドン市内でなじみ深いのが、例えば、イギリスの歴史と政治の表舞台の『ウエストミスター宮殿とその周辺』やロンドンの要塞として建設された中世の趣が漂う白い塔『ロンドン塔』がある。

図１　先の尖った塔が林立する宮殿、ビッグ・ベン、雨のロンドンブリッジ(上)、ナイチンゲール博物館とその館内の健康教育風景(下)

また、テムズ河に架かる美しい跳ね橋はロンドンのシンボルになっている（図１上）。

テムズ河を挟んで宮殿の対岸に位置する聖トーマス病院の敷地内に、ナイチンゲール博物館（1989 年開館）がある。当博物館では、19 世紀ヴィクトリア時代、医療・看護に活躍した「看護師の母」とも呼ばれるフローレンス・ナイチンゲールの生涯と業績を湛えるとともに、市民の医療・健康教育に役立てている（図１下）。

ロンドン南西郊外には世界中から植物を集めた最大の植物園キュー・ガーデンズ『キュー王立植物園』（世界文化遺産）がある。園内は広大な敷地で、約３万種類の植物の育成や生態の研究に、種の保存などに貢献している。

また、東部のカンタベリーには、イギリス国教会の総本山、カンタベリー大聖堂がある。1400 年の歴史をもつイギリス国教会の聖地で、最も権威があり、『カンタベリーの聖堂と修道院』として世界文化遺産に登録されている。カンタベリーからさらに東に向かうと、イギリスとフランスを隔てるイギリス海峡の最狭部ドーバー海峡（幅約 34km）のドーバーに至る。

ロンドンから南東約 22km 離れたところに、進化論で有名なチャールズ・ダーウインが住んだ家跡「ダウン・ハウス（博物館）」（図２）がある。ここでダーウインが「種の起源」（1859 年出版）を執筆したものとして、その書斎が復元・公開されている。

図２　ダーウインの「ダウン・ハウス」とその書斎

イギリスで最も美しいカントリーサイドといえばコッツウオルズであろうか。イギリスの中央部に広がる丘陵地で、特別自然美観地域に指定されている。まるで絵本の世界に迷い込んだような感覚となる。コッツウオルズの南部、ロンドンから言えば車で約２時間のソールズベリ地方には 13 世紀に建てられたソールズベリ大聖堂がある。この聖堂の尖塔は 123m と自慢の高さである。

また、この地で有名なのはソールズベリ平原に佇む謎の巨石群ストーンヘンジ・『ストーンヘンジ、エーヴベリーと関連遺跡』（世界文化遺産）（図３）がある。この遺跡は、約 80 個の巨石が同心円状に配置されており、紀元前 3000～前 1500 年頃に造られたものとされているが、誰が何のために造ったのか、「宗教的儀式か、それとも太陽崇拝の天体観測か」未だ謎である。

図３　先史時代の巨石遺跡ストーンヘンジ
（当地の観光絵葉書より転写）

イギリスで最も人気のある観光地の１つに、ロンドンから西約 50km の所にあるバースがある。その名の通り、温泉バスの語源ともなった都市で、紀元前 44

年、ローマ時代に築かれた町の共同浴場は 18 世紀になってイギリスの上流階級に広まった。2000 年以上の歴史を持つ温泉保養地『バース市街』はイギリスの世界文化遺産に登録されている。

なお、筆者はイギリスは南部、ロンドン周辺しか訪れたことが無いが、世界文化遺産として興味深いのは、ニューカッスルの北、スコットランドとの境界付近の丘陵地「ハドリアヌスの長城」(『ローマ帝国の国境線』)（図４）である。これはローマ帝国が北方の最前線に築いた古代の砦で、長い丘陵地の稜線に沿って土塁が積まれ、一部は石材で補強されている。このようなローマ時代の長城跡はドイツ西部にも残っているという。いつの時代も、戦国の世の中で、国を守るための砦・城壁の建設は、よく知られる中国の「万里の長城」など、規模の大きさに差はあれど、人類の考えることは洋の東西を問わず同じことを示している。

図４『ローマ帝国の国境線』(「ハドリアヌスの長城」)(「世界遺産の旅」、2007 より転載)

ロンドンのハムステッドにイギリスのロマン派詩人ジョン・キーツ（John Keats、1821 年没）の博物館（キーツ・ハウス）がある。病でロンドンからローマに移り、25 歳の若さで亡くなり、現在ローマに記念館がある。彼の代表作は「オート・ト・ア・ナイチンゲール（ナイチンゲールに寄せる歌)」であるが、形の美、美の真実を歌う短い詩（図５）は感銘する。

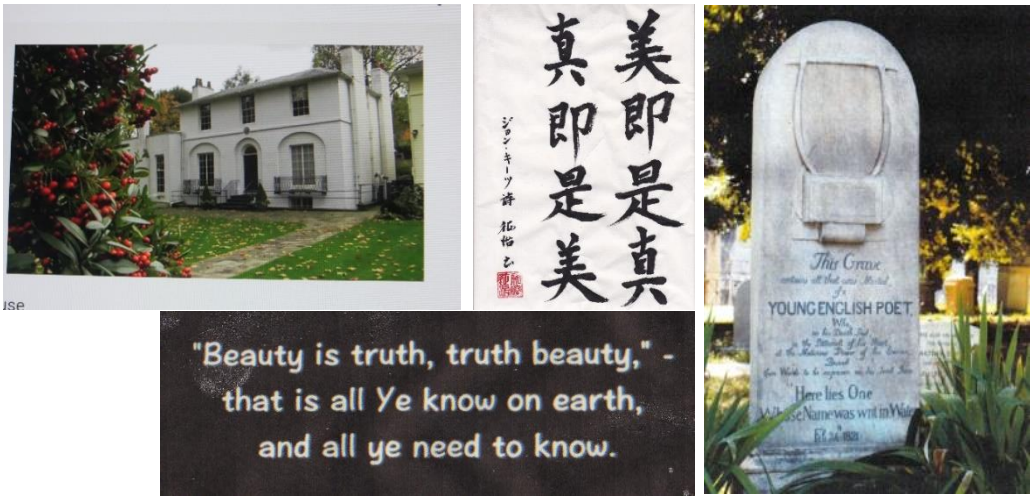


図５　イギリスの詩人ジョン・キースの言葉、博物館と墓碑、訳（著者筆）

ドイツ連邦共和国

ドイツの初旅は、ある年のフランス・パリ開催の短い国際学会出席の帰路、研究交流での訪問（マールブルグ）であった。ドイツと言えば、大学の教養教育時代に第二外国語としてドイツ語を専攻し、悩まされた国である。悩まされたと言えば、ドイツ語試験（翻訳）を思い出す。試験の前日に友人たちとみつけてきた日本語訳本の文章を丸覚えで試験に臨んだ。しかし、慌てて答案用紙には間違えてドイツ語文よりさらに余分のページの日本語訳も書いてしまった。今はもう時効だが誠に不真面目な恥ずかしいである。そんなことを思い出させるほろ苦い不安な“異国“の一人旅は、北はキール（第二次大戦のＵボートの軍港）から出発し、ハンブルグからカッセルを経由してフランクフルトまでのドイツ縦断の鉄道旅であった。途中下車したカッセルは、ドイツ語の名の通り古いお城のある町であり、同時に大学と自動車（フォルクスワーゲン）で有名な町でもある。町中の鉄道キール駅はモダン建築の綺麗な改築駅舎で住民の自慢であったが、当時トイレを作り忘れたのが最大の失敗と、大学の友人は笑って話してくれた。

その後もドイツ語はからっけしダメなくせに、もっぱら国際学会や研究会・セミナーなど専門領域の研究交流で何度か訪れる機会があった。フランクフルトの北、小さな町マールブルグは、16 世紀初めマルテイン・ルターが宗教論議を闘わせた城がある静かな処である。また、19 世紀前半「グリム童話集」で有名なグリム兄弟が通ったマールブルグ大学もある。このマールブル大学は、心臓の刺激伝導系・「田原の結節」の発見（田原淳、1906 年）でも知られているが、筆者は当解剖学講座とリンパ学の研究交流を続けてきた（図６）。一番の思い出は、ある年、セミナーの講演依頼で、ルフトハンザ往復航空券付招聘状が届き、喜び勇んで渡独した。大学での口演後突然の聴衆の拍手と机をドンドン叩く音に何があったのか驚き、それが“スタンディング・オベーイション”であることを知った時は研究を続けて来てよかったと感動した。

図６　マールブルグのお友達
（マールブルグ大学医学部解剖学教室、若き日の研究交流）

ドイツ観光で一般的に人気なのはやはりヴュルツブルグからフュッセンまで南北約 400km のロマンティック街道であろう。街道沿いに点在する都市や美しい城、宗教建築（教会）や工芸品な

ど見て楽しい。街道の北の起点のヴュルツブルグはマイン川のほとりに立つ古都で、街から見える丘の城砦は威風堂々としてそびえている。それは 18 世紀バロックの集大成となる建築であり、『ヴュルツブルグの司教館、庭園と広場』は世界文化遺産となっている。なお、ヴュルツブルグは医師シーボルトの生まれた町であり、またＸ線を発見したレントゲン（第１回ノーベル物理学賞受賞）も当地ヴュルツブルグ大学で研究した。

ヴュルツブルグから少し南のローテンブルグ（図７）は、マインツ―ハイデルベルグ―ローテンベルグ―ニュンベルグと続く古城街道で、ロマンティック街道と交叉する位置にある。街道の目玉で、城郭で囲まれた中世のおとぎの世界のような町である。この街には心の和む人形とおもちゃの博物館やちょっと不気味な中世犯罪博物館もある。

図７　ローテンブルグの街通り

また、ハイデルベルグは、町を見下ろすように堂々たるハイデルベルグ城（図８）があり、古城と大学で有名で、旧市街地の散策は旅情あふれる。ネッカー川に架かるカール・テオドール橋を渡った対岸の丘に“哲学の道“と呼ばれる坂道があるが、哲学の思索をするにはあまりに急坂過ぎるようである。

図８　ハイデルベルグ城（左）、ネッカー川、カール・テオドール橋（右）

観光のハイライトはライン川下りであるが、その両沿岸に多くの古城が見られる。人気なのはローレライ（「妖精の岩」）で、ハイネの同名の詩も有名である。古城と言えば、ロマンティック街道のフィナーレのフュッセンでは、かってバイエルン国王ルードリツヒ２世の幻想のノイシュヴァンシュタイン城がある。図 9 は筆者の渾身の古城撮影である。

図 9 ノイヴァインシュタイン城（左）、　城からの山並み遠望（右）

ベルギー王国

ベルギーと言えば、オランダ、ドイツ、フランス、小国ながらルクセンブルグに囲まれ、北海に面した国であるが、首都ブリュセルに半日寄っただけである。ブリュセルの旧市街地の中心には壮麗な建物に囲まれたか大きな広場グラン・プラスがある。ここは文豪ヴィクトル・ユゴーが「世界一豪華な広場」と湛えた広場であり、歴史と生活の中心をなす大広場を含め『ブリュセルのグラン・プラス』として世界文化遺産にもなっている。この広場からすぐ近くに、17 世紀に造られた「小便小僧」（ジュリアン君）の像(図 10)がある。この像は、敵軍がブリュセルの城壁を崩すため火薬の導火線に火をつけたが、城の王子がおしっこをかけて消したという伝説に由来するという。意外と小さいので、見過ごしがちである。

図 10　ベルギー・ブリュセルの旧市街地の「小便小僧」

フランス共和国

パリから長距離バス約３時間で、有名な修道院の『モン・サン・ミッシェル（Mont St-Michel）とその湾』（世界文化遺産）に着く（図 11)。ノルマンデーの海に浮かぶ島の要塞のような姿である。ガイドブツクによると「陸と島を結ぶ長い堤防伝いに近づくと、大男の足元に忍び寄る小人になったような気がする」とある。確かに見上げるような花崗岩の要塞に圧倒された。

10 世紀に修道院として創設されたが、14 世紀の百年戦争では城塞として使わ

れ、その後フランス革命後では監獄となった。現在は修道院として、島は聖地となり、巡礼者が多数訪れる。島の周辺は潮の干満の差が激しく、干潮時には対岸と陸続きとなり、満潮時には海水で満たされ島は孤立する。19 世紀後半には堤防道路が築かれたが潮流の変化の為、現在堤防が取り除かれ橋が築かれている。

図 11 モン・サン・ミッシェル修道院（左）と塔上からの干潮時のノルマンディ海岸の眺望（巡礼者 or 観光客？）（右）

筆者のパリ訪問はもっぱら芸術探訪で、いくつかの美術館、オペラハウスや教会巡りである。とくにお気に入りは「花の都」の『パリのセーヌ河岸』(世界文化遺産)である。東京の六本木にも“美のトライアングル“といわれる３つの大きな美術館があるように、よく知られているルーブル美術館、オルセー美術館そしてオランジュリー美術館がある(図 12, 13)。

短いパリ訪問の日、朝早くから長蛇の列にもめげず、そして夕方まで館内を巡り、芸術鑑賞に浸る。それはまさに、「芸術は体力だ！」の言葉を痛感するときである。

図 12　パリ・ルーブル美術館前広場、開館 9:15am 前の大勢の入館待ち（上）、開館直後、混雑する受付の広場ピラミッドの下（下）

海外の美術館・博物館では大方、ノーフラッシュの看板の下、記録として作品を写真に収めることが出来るので、後日の楽しみでもある。かってアナログ撮影では、カメラの中のフィルムの残り枚数が気になって失敗も多かっ

た。しかし、デジタル撮影の近年では、一度の旅で 1000 枚以上も撮れるので便利でもあるが、後のデーター整理に苦労もある。

図 13　パリ・セーヌ河岸の並木（ルーブル美術館からオランジュリ―美術館への道）（左）、オランジュリ―美術館内のモネー睡蓮の大壁画、圧巻！（右）

日本国内でいう「美術館」と「博物館」との違いは？
海外ではよく知られているように、すべて「museum」である。近年では国内でも海外のように「ミュージアム」という名もあるようである。それは従来の「美術館」や「博物館」とどう違うのであろうか？
Museum(ミュージアム)の語はラテン語由来で、もともとミューズという詩の女神に掲げられたところ(哲学的な瞑想の場)を意味するギリシャ語からきたものである。ちなみに、音楽の Music は「ミューズ的」ということであろう。18 世紀中ごろからヨーロツパでは、絵画・彫刻や骨董・遺品など造形芸術のコレクションを収蔵する場所として、ウフィツイ美術館、大英博物館、ルーブル美術館、プラド美術館など盛んに Museum が造られた。美術館と博物館は、基本的な概念として、教育を含む知的な活動のための原物資料の収集と展示を行う施設である。なお、原物という点で、印刷・コピー製本の図書館とは明らかに別である。問題は現物資料が美術品であれば「美術館」、それ以外であれば「博物館」とされているわけであるが、この区別は絶対的ではない。

ある年、南フランス・アルル地方を観たくて、成田発チューリッヒ（スイス）経由でニース（南フランス）に飛び、ニースよりバスでプロバンス地方へ向かい、目的のアルル地方を観光した。アルルは、当時絵画制作に苦悩する画家ゴッホ（後世”炎の画家“）が、まぶしい太陽と澄んだのどかな風土に憧れパリから移住し、開放感を楽しみ充実した画家生活を過ごしたところである。ゴッホがアルルで描いた「ひまわり」、運河に架かった「ラングロワ橋」(”ゴッホの跳ね橋“)や「夜のカフェテラス」などは特に有名であり、それらを描いた場所を訪

ねて歩いた。「夜のカフェテラス」の場所は、現在「カフェ・ヴァン・ゴッホ」になっており、それなりに絵の雰囲気を残している（図 14)。

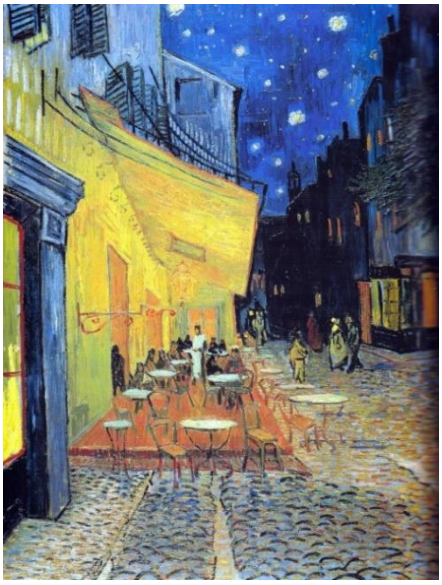


図 14　「夜のカフェテラス」
（ゴッホ 1888、オランダ、クレラー）（左)、
ゴッホが描いた場所（現在はカフェーフ
ヴァン・ゴッホ」となっている)。(右)

中世の一時期、教皇がローマでなく南フランスのアヴィニオン（ローヌ川とデュランス川の合流点）に住んでいたことがあり（「教皇のバビロン捕囚」と言われた)、教皇庁とローマ国王の間で勢力争いが絶えなかった。当時アヴィニオンは、多くの王侯貴族や学者、詩人、芸術家などが集まり、プロバンス地方の中心都市として栄えた（『アヴィニヨン歴史地区』、世界文化遺産)。その宮殿側からは、フランス民謡「アヴィニヨンの橋の上で」に歌われたサン・ベネゼ橋がみられる（図 15, 16)。なお、対岸からであれば宮殿と橋が同時に眺めることが出来る。橋は 17 世紀の洪水で流され、現在４つのアーチが残るもみである。

図 15　アヴィニヨンの教皇宮殿

図 16 サン・ベネゼ橋また、

アヴィニオンから西に、紀元前 19 年頃に建てられたという古代ローマの水道橋『ポン・デユ・ガール』（世界文化遺産）（図 17)がある。三層からなる水道橋

は全長 50km もの導水路の一部であるが、古代ローマの土木技術の高さには驚かされる。　図 17 古代ローマの水道橋
ポン・デユ・ガール

南プロバンス地方から東へイタリア国境まで続く地中海沿岸をコート・ダジュール（「紺碧海岸」の意）という。その中心がニース(図 18)で、気候が温暖で美しい海と太陽に魅せられた芸術家が多いという。

図 18　ニースの海岸のロゴマーク

ニースでは世界的に春のカーニバル（謝肉祭）での「花の女王」パレードの山車が有名である。また、この南フランスのマントンのレモン祭り（図 19）も観光の人気である。約 1 ケ月ぐらいの祭りの後、使用したレモンやオレンジはジュースにするとか。

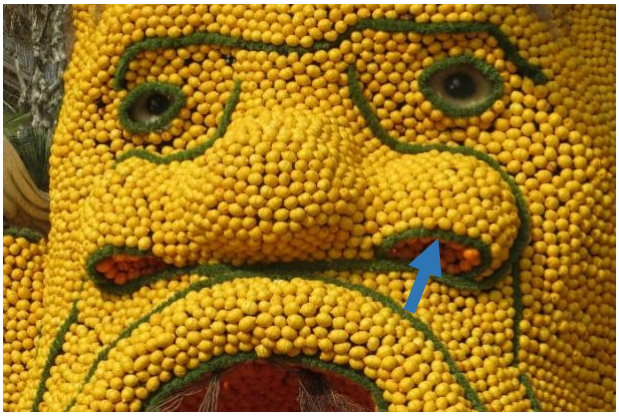


図 19　マントンのレモン祭り。祭りが終るとスになる。人形の鼻の孔のオレンジジュースは飲みたくな

モナコ公国

モナコ公国は人口約４万弱のヴァチカンに次いで世界２番目の小さな国である。と言ってもフランス語が

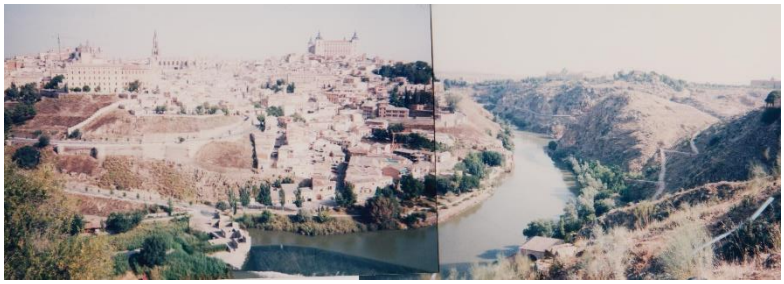
図 20 モナコの港

公用語で、フランスの１つの都市と言うような感覚がある。モナコ大公宮殿や王妃グレース・ケリーが眠るモナコ大聖堂を見学し、図 20 はその高台から見る美しいモナコの港風景である。有名なＦ１レースのスタート・ピットイン，
そしては地中海へ出航する豪華客船がみえる。

スペイン

スペインへは一度だけ首都マドリードとバルセロナを旅し、後年ポルトガルとともに北スペインサンチャゴ・デ・コンポステラを訪れた。マドリッドには有名なプラド美術館がある。その美術館の正面玄関には、ベラスケス門として名高いベラスケスの像やその左側にゴヤの銅像があり、初めての訪問・入館の著者にとって、まさにその荘厳さと崇高さに、心が高まる思いであった。作品の中ではやはりベラスケスの絵画「ラス・メニーナス」が迫力がある。絵の中の少女と目が合い、歩くと視線に追われていつまでもこちらを見つめられているようで、印象的であった。

マドリッドからバスで南へ約１時間のところに、三方を川に囲まれ、町に入るには２つの橋しかないという天然の要塞・『古都トレド』（世界文化遺産）（図 21）がある。６世紀頃首都となり、16 世紀半ば都がマドリッドに移るまで、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教が共存し繁栄した。今も古い町並みが残っており、文化と芸術を育んだ都とそして保存されている。



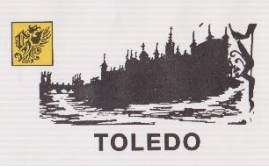


図 21　蛇行するタホ川に囲まれた古都トレド、大聖堂と王宮が見える

スペインの東部カタルニア地方の地中海に面した港町バルセロナは、いろいろ見どころ満載である。何といってもカタルーニアが世界に誇る天才建築家『アントニ・ガウディの建築』（サグラダ・ファミリア聖堂、世界文化遺産）（図 22）が目につく。

また、モンジュツクの丘は日本でもバルセロナ・オリンピックでよく知られ、モンジュイック城からの市内展望は素晴らしい。

図 22 サグラダファミリア聖堂と架橋（矢印）（左）、架橋まで至る見事なラセン階段（右）

図 23　バルセロナ海岸に立つコロンブスの像

バルセロナはピカソの育った町でもあり、筆者のお気に入りは（と言っても１度だけであるが)、ランブラス通りで、海に向かって下ると、そこに西に向かい指さすコロンブスの塔(図 23)がある。

北スペインの『サンチャゴ・デ・コンポステーラ（旧市街地)』(世界文化遺産）は、スペインの守護聖人、聖ヤコブ（キリストの十二使徒の一人）の墓の発見から、それを祭る大聖堂（図 24）が建ち、キリスト教の聖地として巡礼者たちが集まるようになった。サンチャゴ・デ・コンポステーラの名はこの聖ヤコブのスペイン語名サンチャゴからきており、「星の原のヤコブ」の意味もつ。

図 24　サンチャゴ・デ・コンポステーラの大聖堂、ただ今修復中、残念！

『サンチャゴ・デ・コンポステーラ巡礼道』(世界文化遺産、スペイン/フランス）は、フランスからピレネー山脈を越え、スペイン北部を通る約 800km の行程である．何の交通機関もない時代､様々な階級の人々が，ホタテ貝を身につけ、水を入れるひょうたんを提げた杖を手に、さまざまな思いを胸に“聖なる地“を目指して巡礼し、ついに当巡礼地にたどり着く（図 25）．

図 25 サンチャゴ・デ・コンポステーラ「歓喜の丘」

なお、旧市街地の教会の建物の塔には、ギリシャ神話で宇宙を双肩で支えている巨人神アトラスの像が見られる（図 26）。

西の果て、北アフリカのアトラス山脈はギリシャ神話の宇宙を支える神アトラスに由来するものである。大西洋をアトランティックと呼ぶのも、アトラス山脈を境として西方に大洋が始まることを意味している（「旅鳥逍遥」６、モロッコ・アトラス山脈）。

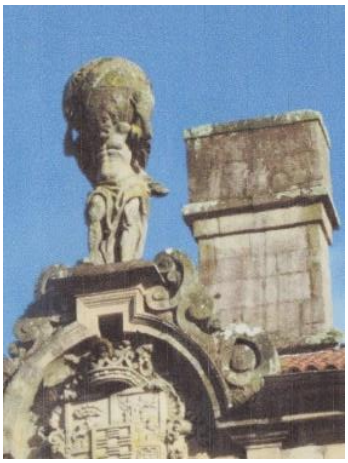


図 26　サンチャゴ・デ・コンポステーの旧市街地の教会の塔上にある像（アトラス）

ポルトガル共和国

北スペインから下ってポルトガルに入ると、ポートワインの積み出し港として名高いポルトがる。ポルトは首都リスボンに続く第二の都市で、国名の由来となった町である。町の『ポルト歴史地区』（世界文化遺産、図 27）は中世に建てられた聖堂や宮殿が多く残っている。SANDEMAN のワインの試飲もご機嫌である。街を流れるドウロ川に架かるドン・ルイス 1 世橋からの景観は素晴らしい。

図 27 ポルトの街、ワイン樽の貯蔵と河川運搬

ポルトの南に 12 世紀にポルトガル王国の首都であったコインブラがあり、13 世紀に設立された世界最古の大学の１つであるコインブラ大学(図 28)がある。

町は大学と共に街も発展し、大学の建造物群など世界文化遺産に登録されている。コインブラ大学の医学部の図書室に入ると、書架にラテン語図書が並び圧巻である。本と言えば、街のクラシック本屋の風格に圧倒される（図 29）

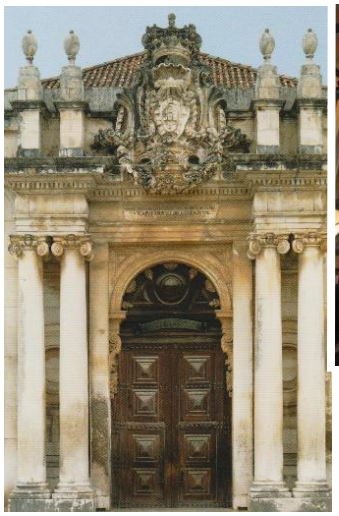


図 28 コインブラ大学図書館

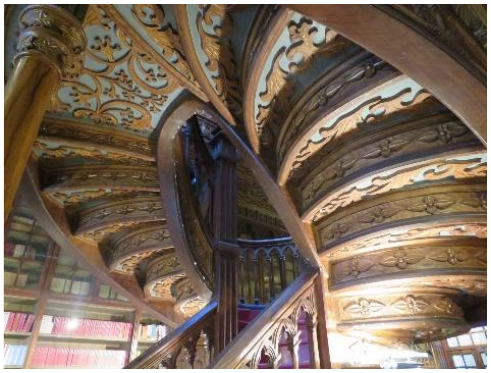


図 29 街の本屋の２階風景（左）、木造の豪華なラセン階段（右）

付）コインブラの街角のベンチでひと休み

コインブラから南へ少し下った小さな街トナマールでは、テンプル騎士団により城塞と聖堂が併設する修道院がある（図 30）。ちなみに、テンプル騎士団は、12 世紀初めエルサレムへの巡礼者保護を目的として設立されたものであるが、14 世紀に入り解散、その栄光と悲劇を伝える『トナマールのキリスト修道院』は文化遺産となっている。

図 30 トナマールのキリスト修道院

さらに海岸線を南へ下ると、ポルトガルでも最も色彩豊かな小さい漁村ナザレキが見える。ここは温暖な気候と自然が美しいビーチが有名である。

図 31 ナザレの海岸（左）と旅の幸運を祈る美しい虹（右）

首都リスボンの近くの山系に駆ってポルトガル王家の夏の離宮『シントラ』（世界文化遺産）（図 32）があり、おとぎの城・ペナ宮殿が面白い。

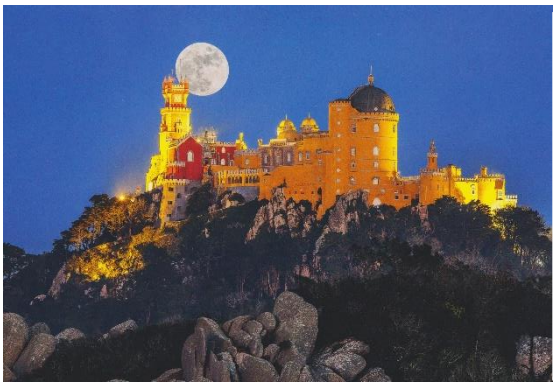


図 32 ポルトガル・『シントラ』（現地の絵葉書より転写）（左）、離宮内（右）

リスボンの近くの海岸線にはヨーロッパ大陸最西端のロカ岬（高さ 140m）（図 33）がある。ここはポルトガル人にとって昔から「地の果て」・「海の始まる地」などと信じられている。

図 33 ロカ岬の風景とそのモニュメント